

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00404

研究課題名(和文) ジャクソニアン・デモクラシー期の米国社会の世俗化・市場化と物語形式の変容

研究課題名(英文) The Secularization and Marketization of the U.S. Society and the Transformation of Narrative Forms in the Jacksonian Era

研究代表者

堀 智弘 (Hori, Tomohiro)

弘前大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：10634719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：ジャクソニアン・デモクラシー期以来、顕著となったアメリカ社会の世俗化と市場化の動きが南北戦争期までのアフリカ系アメリカ人の物語形式の発展に与えた影響について、特にフレデリック・ダグラスの第二次自伝への理神論からの影響を分析することにより、逃亡奴隷体験記が宗教的な枠組みから世俗的な物語形式へと移行していく歴史的過程の重要な一面が明らかになった。本研究に関連する問題について、英語論文2本を含む3本の論文を執筆し、いずれも査読付きの学会誌に掲載されることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の学術的意義は、思想史的なパラダイム・シフトと物語形式の変容の関連性について領域横断的なアプローチで分析を行い、社会と文学との連動性をとらえる新たな視野を導入したことにある。1980年代以降の奴隷体験記への学術的関心の高まりから、アメリカ文学・文化研究分野での研究成果は近年数多く産み出されているが、ほとんどの研究では、同時期のアメリカ文化全体のパラダイム・シフトとの関連性については、隣接するテーマとの関連で付随的に論じられる傾向が強かった。本研究は、こうした状況にあって、領域横断的なアプローチに基づく包括的な視座を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the impact of the U.S. society's marked trend of secularization and marketization since the Jacksonian era on the development of African American narrative forms. By investigating the deistic influence on Frederick Douglass's second autobiography *My Bondage and My Freedom* (1855), this study has revealed an important thread of the historical process in which the slave narrative developed out of a religious cultural framework into a secular narrative form. I wrote three papers on issues related to this study, all of which were accepted by refereed journals.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 逃亡奴隷体験記 世俗化 ジャクソニアン・デモクラシー 理神論

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景にあったのは、現在に至るまでアメリカ文化を特徴付ける、リベラリズム、プラグマティズム、資本主義や科学技術の信奉といった世俗的な思考様式と宗教的信仰を両立させる心性はいかにして成立したのかという疑問である。古くは社会学者マックス・ヴェーバーの古典的著作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1920年)にまでさかのぼるこの問いを考えるうえで、ジャクソニアン・デモクラシー期(広く1820年代あたりから南北戦争期までの時代を含む)がアメリカ思想史上の重要な転換点として位置付けられてきた。たとえば、近年におけるジャクソニアン・デモクラシー期の社会変容についての最重要の包括的研究である *What Hath God Wrought* (2007) において、Daniel Walker Howe は、宗教的真理と科学的真理の併存、プロテスタンティズムと啓蒙主義の結合がこの時期のアメリカ文化を形成していたことをさまざまな視点から明らかにしている。ジャクソニアン・デモクラシー期に確立された信仰と合理的思考の共存のための文化的パラダイムが、カルヴィニズムに由来する宗教的世界観からより世俗的な価値観へのアメリカの思想風土の転換を可能にし、現在に至るまでアメリカ文化を特徴づけていると考えられる。

ジャクソニアン・デモクラシー期の劇的な文化変容という時代背景にあって、本研究が問題とするのは、同時代の文学テキストは伝統的なキリスト教的世界観と新たな社会的現実を媒介するうえで、いかなる役割を果たしたのかという点である。この問題を考察するために、本研究は主に以下の3点に注目した。

- (1) 福音主義と理神論の同時的隆盛。宗教的熱狂の発露としばしばみなされる福音主義 (evangelicalism) と、理性の範囲内で信仰をとらえなおそうとする啓蒙主義的な理神論 (deism) は方向性としては正反対の傾向でありながら、特にジャクソニアン・デモクラシー期のアメリカにおいては、理神論の流れを汲む超絶主義 (Transcendentalism) が時に「知識人の福音主義」(R. Hofstadter) と形容されるように、福音主義と理神論は多くの点で重なり合っており、まさにこの重層的発展こそがこの時代においてアメリカ社会に特有の宗教的文化の広範な浸透と一般化を促したと考えられる。
- (2) 神意 (Providence) から確率論 (Probability) へのパラダイム・シフト。社会が世俗化するなかで、絶対的な神との関係性の視点から現世の存在をとらえようとする宗教的な世界観から、リスクや偶然性に満ちた世界のなかで個人がどう生きるかを問題とする合理的な世界観への移行が起きたと考えられる。このパラダイム・シフトは、近代においてさまざまな領域で徐々に進行していた超越から内在へ、あるいは目的論から経験論への動きと連動していた。
- (3) アフリカ系アメリカ人文学の物語形式の発展。十九世紀初頭からの信仰復興運動において、特にメソディズムやバプティズムに代表される福音主義系の新興の宗派が、それまでキリスト教信仰を知らなかった奴隷たちに布教の手を伸ばし、多くの信者を獲得したように、アフリカ系アメリカ人は信仰覚醒運動の重要な担い手となっていた。そうした時代背景を反映して、当時のアフリカ系アメリカ人文学の代表的ジャンルである逃亡奴隷体験記 (slave narrative) は、特にその初期においては、植民地時代から続くキリスト教的な回心体験記 (conversion narrative) としての性質を色濃く有していた。アメリカにおける最初の逃亡奴隷体験記と目される *Life of William Grimes* (1825) から、このジャンルの最大の代表作であるフレデリック・ダグラスの奴隷体験記 (*Narrative of the Life of Frederick Douglass*, 1845) を経て、ダグラスの第二自伝 *My Bondage and My Freedom* (1855)、さらにはアフリカ系アメリカ人による最初期の小説である William Wells Brown, *Clotel* (1853) や Frank J. Webb, *The Garies and Their Friends* (1857) に至るまでのわずか一世代ほどの期間で、宗教的物語から小説ジャンルへの発展を遂げた初期アフリカ系アメリカ人文学は、キリスト教信仰からより世俗的な世界観の模索へという植民地時代からジャクソニアン・デモクラシー期にかけてのアメリカ社会の長期的な傾向を、比較的短い時間枠のなかで最も劇的に反映している。

## 2. 研究の目的

ジャクソニアン・デモクラシー期の急激に民主化・市場化しつつあるアメリカ社会において、同時代の文学テキスト、特に奴隷体験記をその典型とするアフリカ系アメリカ人のテキスト群が、旧来のキリスト教的世界観と新たな世俗的世界観の狭間にあってどのような社会的文化的要請に直面し、この二つの世界観をいかに媒介していたのか、そして、その物語形式をどのように発展させたのかを明らかにすることが本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

上記「研究の目的」で記した2点を明らかにするために、米国で収集した資料などを分析し、(1) エマソンからダグラスに至る理神論的思考の系譜、(2) アフリカ系アメリカ人のテキスト群における世俗的思考の浸透と拡散の2点について重点的に検証を行う予定となっていた。

#### 4. 研究成果

ジャクソニアン・デモクラシー期以来、顕著となったアメリカ社会の世俗化と市場化の動きが南北戦争期までのアフリカ系アメリカ人の物語形式の発展に与えた影響について、特にフレデリック・ダグラスの第二次自伝への理神論からの影響を分析することにより、逃亡奴隷体験記が宗教的な枠組みから世俗的な物語形式へと移行していく歴史的過程の重要な一面が明らかになった。さらに、宗教性と世俗性との間で作用する社会的な諸力は、逃亡奴隷体験記の時代を超えて、二十世紀に至るまでアフリカ系アメリカ人文学が変容する上で長期的かつ深大な影響を及ぼしている可能性が示唆された。本研究に関連する問題について、英語論文2本を含む3本の論文を執筆し、いずれも査読付きの学会誌に掲載されることになった。

年度ごとの研究成果は以下の通り。

##### 【2018年度】

黒人研究学会全国大会のフレデリック・ダグラス生誕200年記念シンポジウム(6月)にパネリストとして招かれ、「理性主義と自己信頼 十九世紀アメリカの理神論的文化におけるフレデリック・ダグラス」と題する発表を行なった。自伝の度重なる加筆修正、そしてダグラスの思想を貫く理性主義にもかかわらず、なぜダグラスはSandy Jenkinsから怪しげなお守りをもらうというエピソードに重要性を見出し続けたのかという問題を、啓蒙主義から十九世紀半ばまで継続していた理神論的文化の文脈の中に位置付けて考察した。これにより、特に第二自伝 *My Bondage and My Freedom* (1855年)における「自然神学」的なプロジェクトの中心性が明らかになったとともに、ダグラスと同時代の代表的知識人であるエマソンとの思想的相関性を今後解明していくための方向性も見出すことができた。

本研究が対象としている時代の世俗的な科学的思想の文化全般に関連して、「蘇生のおぞましきドラマ 「ベレニス」、「モレラ」、「ライジーア」におけるポーの化学的創作手法」と題する論文を執筆し、学会誌に発表した。十九世紀半ばのアメリカの代表的作家エドガー・アラン・ポーがその創作手法を確立していく時期の代表的な短編作品群になぜ死者の蘇生という主題が頻出するのかという問題について、十九世紀に隆盛した死の文化と作家による化学的な創作手法の模索という観点から考察し、ジャクソニアン・デモクラシー期のアメリカ社会の世俗化が同時代の文学の変容にどのような影響を与えたのかについて、より広範な視座を明らかにすることができた。

さらに、ダグラスの第二自伝 *My Bondage and My Freedom* の日本語訳に着手し、第1～2章の日本語訳を発表した。第一自伝 *Narrative of Frederick Douglass* (1845年) は数種類の日本語訳がすでに存在し、しばしば紹介もされているが、第二自伝の日本語訳はまだなされていない。日本語訳の出版により、日本におけるダグラス研究ひいてはアフリカ系アメリカ人文学研究により大きな発展が期待される。

##### 【2019年度】

9月21日から29日にかけて、アメリカ合衆国ジョージア州に赴き、南部・カリブ海文学の研究者であるジョージア大学のJohn W. Lowe教授との意見交換を行なった。さらに、同大学図書館で資料調査を行い、アトランタのキング牧師国立歴史地区や公民権・人権センターを視察した。この出張を通して、本研究にかかわる資料を収集するとともに、本研究をより巨視的、長期的なアフリカ系アメリカ人文化の歴史的発展のなかに捉えなおす視座を得ることができた。

ジャクソニアン・デモクラシーへの助走となる建国後のアメリカ社会の世俗化と物語形式の変容に関連して、啓蒙期以来広く流布していた崇高の言説がゴシック小説にどのような影響を与えたのかという観点から、Charles Brockden Brownの *Edgar Huntly* (1799) を読解した英語論文を執筆し、学会誌に掲載された。

前年度から引き続き、ダグラスの第二自伝 *My Bondage and My Freedom* の翻訳作業を行い、第3～6章までの日本語訳を発表した。翻訳作業の中で様々な調査を行い、本研究を遂行する上で必要となるダグラスの生涯と直作についての理解を深めることができた。

##### 【2020年度】

最終年度に予定していた米国での研究成果発表は、世界的な感染症の拡大のため実施できなかった。

本研究が当初重点的に検証を行う予定であった2点のうち、特に、アフリカ系アメリカ人のテキスト群における世俗的思考の浸透と拡散という問題に関連して、モダニズム/ハーレム・ルネサンス期の作家Claude McKayの小説 *Banjo* (1929)の近代性を検証する英語論文を執筆した。アフリカ系アメリカ人小説の発展において、McKayの作品はこれまであまり注目されてこなかったが、近年、新たな草稿が発見され出版されるなど、再評価が活発に行われつつある。McKayの第二小説 *Banjo* は、フランスの国際的な港湾都市マルセイユを舞台として、様々な出自のアフリカ系の登場人物が入り混じって小説世界を形作っており、近代文明におけるアフリカ系アメリカ人文化の位置付けを根本的に問い直している。本論文は国際的なモダニズム文化の観点から本

作品を検証することを通して、アフリカ系アメリカ人小説形式の世俗化という長期的な歴史的発展過程の中に本作を位置付けている。本論文を米国の有力な学会誌に投稿し、掲載が決定した。

引き続き、ダグラスの第二自伝 *My Bondage and My Freedom* の翻訳作業を実施し、第7～8章の日本語訳を発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 堀 智弘	4. 巻 43
2. 論文標題 The American Moral Painter in Absolute Darkness: Metaphoric Contagion and the Sublime in Edgar Huntly and After	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北アメリカ文学研究	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀 智弘	4. 巻 11
2. 論文標題 蘇生のおぞましきドラマ:「ベレニス」、「モレラ」、「ライジーア」におけるポーの化学的創作手法	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英文学研究 支部統合号	6. 最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20759/elsjregional.11.0_63	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomohiro Hori	4. 巻 63
2. 論文標題 The Dialectics of Barbarous Civilization: Black Transnational Modernism in Claude McKay's Banjo	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Texas Studies in Literature and Language	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀 智弘
2. 発表標題 理性主義と自己信頼—十九世紀アメリカの理神論的文化におけるフレデリック・ダグラス
3. 学会等名 黒人研究学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------